

★知っておきたい古典の知識

『源氏物語』は『竹取物語』に始まる伝奇物語（作り物語）と、『伊勢物語』のような歌物語のどちらの要素も併せもった作品です。四代の天皇の時代が描かれ、全編で五十四帖あり、年数にすると約七十余年にもわたる大作となっています。内容は、光り輝く貴公子「光源氏」のドラマチックな生涯を描いており、当時の人々にもてはやされたようです。（『更級日記』では、都で評判の「源氏物語」を読みたいと神仏に祈る筆者の菅原孝標の女の姿が描かれています。）『源氏物語』は古典作品として優れているだけでなく、人間とは何かを深く考えさせる、高い文学性をもつ、日本文学を代表する作品といわれています。

身に付けると…

平安貴族の生き方に触れることができます。
平安時代の人々のものの感じ方・考え方を知ることができます。
今と変わらぬ人間の心情、ものの感じ方、考え方も感じ取ることができます。

読んでみよう

《口語訳》

どの天皇の御代であつたか、女御や更衣などたくさん女官がいっぱしやるときに、それほど高い身分ではないが、とりたてて天皇の寵愛を受けていらつしやつた方があつた。（宮仕えの当初から我こそは（天皇の寵愛を受ける）とうぬぼれてていらつしやつた方々は、この方を氣にくわないものとさげすんでねたまれる。この方と同じくらいの身分の方や、それより低い身分の方は、さらに心中おだやかでない。（このお方が）朝夕の宮仕えをなさるにつけても、他の方々の心をやきもきさせ、恨みを買うことがつもりつもつたからであろうか、ひどく病がちなって、なんとなく心細い

様子で里にひきこもることが多くなつていかれたのを、（帝は）ますます愛おしくお思いになつて、人が何と言おうとおかまいになることなく、後世の語り草になつてしまひそうなご寵愛ぶりである。身分の高い公卿や殿上人たちも、合点のゆかぬ様子で目を細めては、「たいそうなご寵愛ぶりであることよ。中国でもこのようなことが原因で、国が乱れたりしたのでさうだよ。」と次第に世間でも、苦々しく人の悩みの種になつて、楊貴妃の例まで引き出されるようになって、この方には不都合なことが多かったけれども、（帝の）ありがたいご寵愛がこの上ないのを頼りに宮仕えを続けていらつしやつた。

《語句の説明》



時めきたまふ…「榮えておられる」という一般的な意味から、ここでは、「帝のご寵愛を受けておられる方」という意味になります。

あつしく…「篤しく」。病弱に。はしたなし…不都合だ。

上人…昇殿を許された四、五位の貴族のこと。殿上人。

楊貴妃…中国の唐の玄宗皇帝が楊貴妃を寵愛したばかりに国が乱れたという史実に基づいた伝説があります。

《平安時代の貴族の生活》

平安時代は、有力貴族が娘を天皇の后とし、娘の生んだ皇子の外戚（母方の祖父）として政治の実権を握っていました。したがって、身分の低いものが寵愛を受けるのは、政治が乱れるものとなつたのです。